

### 北海道に渡った漆器たち

かつて漆器の売買などを手広く営んでいた 浄法寺町の佐藤家の売り上げ台帳によると、 大正から昭和初期にかけ、かなりの数の漆 器が北海道へと移出されている。三ツ椀な どの雑器がニシン小屋で大量に使われたほ か、漆器という文化を持たないゆえに珍重 したアイヌの手にも渡ったという。



天台寺と漆の 古い関係

天台寺に現存する最も古い漆器は室 町時代の作と伝えられる観音籤筒だ。 この筒には黒漆が分厚く塗られ、筒全 面にはこれを奉納した沙門白雲道山の 銘文が朱漆で書かれている。室町時 代ですでに今と変わらぬ塗りの技術が あったことが見てとれる。

## 木地師はどこから やってきた?

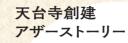
木地師の始まりは近江国にあるとされて いるが、安比川流域の木地師の祖である 左衛門四郎は、天文年間 (1532-1555) に 美濃国より浄法寺松岡にやってきたとさ れる。そして、その左衛門四郎のルーツ を伝えるのが「木地師元祖略御縁起」だ。 古文書には、ロクロを発明した小野宮惟 喬天皇の子孫として先祖代々木地挽きに 従事してきたことが記されている。





# 中尊寺金色堂に 使われた漆

金色堂創建時に浄法寺漆が使われた という記録はない (使用された可能性 は十分に考えられる)。しかし、昭和 37年 (1962) より 6 年間かけて行われ た解体修理の際には合計で5貫目樽 6本(約112kg)の浄法寺漆が使われ た。光り輝く金色堂の意匠を浄法寺漆 は陰で支えているのである。



天台寺が現在の場所に創建された理由は中国の 天台寺に似た八峰八谷の地形だったとされてい る。しかし、この地に決まるまでにはいくつかの 候補があった。そのことを伝えるのが「杉沢伝 説」で現在の浄法寺町杉沢地区が最初の適地と され、杉の植林も始まったという。しかし、創建 を執り仕切る上人様が事故に遭ったことで新た な聖地探しとなり、今の御山に落ち着いたという。





縄文人、漆を使う

安比川流域の漆と人の歴史を遡ると 縄文時代に辿りつく。それを物語る のが漆で加飾した漆塗石刀(上杉沢 遺跡)と漆を貯蔵したと思われる鉢 (赤坂田 | 遺跡) だ。果たして縄文人 にとって漆はどのような存在で、用 途はどのようなものだったのか。想

像はふくらむばかりである。

1912~ 大正年間

明治30

1884

明治年間

1861~

文久年間

文化5

1806

文化3

1790~

寛政年間

1759

宝暦9

1741

實保元

1722 享保7

寛文12

1663~

寛文年間

1644 正保元

1616 元和2

1599 慶長4

1540 天文9

文化の始ま

728 神亀 5

縄文時代後期(約4000~3000年前)

域 ルの

#### 世界遺産になった漆文化

令和2年(2020)、「伝統建築工匠の技 木造建造物を受け継ぐための伝統技術」がユネスコ無形文化遺産に登録された。この工匠の技の項目には日本産漆生産・精製も含まれており、浄法寺の日本うるし掻き技術保存会が保存団体として登録された。





#### 約 360 年ぶりの大修理

平成25年(2013)より天台寺では大規模修理が行われた。天台寺の本堂が建立されたのは万治元年(1658)だが、実は大規模修理は今回が初めて。約7年という長い時間をかけて、建立当時の姿へと復元された。

#### 地名にみる漆文化

安比川流域には「畑」という地名がいく つか存在する。この地名の意味は木地 の原料となる原木を伐り出す「木地山」 のこと。浄法寺にある「ゴキ畑」は安比 川流域の木地師の祖である左衛門四郎 が暮らしたことでも知られており、地名 にも漆文化の影響がみてとれる。



# 漆器が語る生活

映画「うるし日記」

状況が垣間見えて興味深い。

終戦後の漆産業の啓発を目的として昭和

22年 (1947) に短編映画が製作された。

撮影地は二戸地方でドキュメンタリー要素

も強く、当時の安比川流域の漆を取り巻く

平成18年 (2006)、二戸市浄法寺町の 故・小田島昭夫氏の自宅から約 4000 点の漆器や古文書が見つかった。か つてはこれらの漆器を用いて冠婚葬 祭などを行ったほか、農作業を手伝っ てくれた人たちに栗飯などを振る舞っ たという。漆器から当時の暮らしを想 像することができる。



#### 御禁制の南部箔椀って?

安比川流域では伝統的に華美な加飾を施さない漆器が主流とされてきたが、南部箔椀だけは蒔絵に金箔貼と豪華な佇まいである。実は南部箔椀は庶民が使用したものではなく藩主への献上品だった。江戸期に盛んに作られたこれらの椀は、御禁制品として厳重に管理されて盛岡藩に納められた。藩では他藩への土産物として活用した。



31